

城山遺跡群

調査概要報告

福智町文化財調査報告書

第2集

2011

福智町教育委員会



城山遺跡群（上空より）

序

筑豊はその名が示すように、筑前と豊前が接する東西文化の交流地帯であり、筑豊の一角にある福智町は、福智山系を仰ぎ、英彦山川と中元寺川が合流し貫流する自然あふれる地です。

また、400年以上の伝統を誇る上野焼に代表される陶芸の里、童謡作曲家として有名な河村光陽生誕の地であり文化的にも恵まれた地でもあります。

本書では、平成20年度から行っている城山遺跡群の調査について概要を報告します。この遺跡は横穴墓群を主体とする遺跡であり、城山遺跡群の横穴墓群は九州でも最大規模のものです。調査は継続中であり、更なる発見があるかもしれません。私どもは、この遺跡を末永く保存し次世代に継承しなければならないと考えています。そして「ふるさと」再発見、「まちおこし」の一助になればと思います。

いにしえ人の生活を思い、文化財保護への意識向上、並びに地域の歴史を知る上で、ご活用いただければ、幸甚に存じます。

なお、今回の発掘調査、報告書の刊行に際し、ご指導・ご協力くださいました方々、および関係機関に対して、心から感謝いたします。

福智町教育委員会
教育長 嶋野 勝

例 言

1. 本書は、福智町西金田地区の急傾斜地崩壊対策事業の計画に先立ち、遺跡の範囲内容確認を目的として実施した、田川郡福智町金田所在の城山遺跡群の事前確認調査の報告書である。福智町文化財調査報告書の第2集にあたる。
2. 発掘調査及び報告書作成は福智町教育委員会が国庫補助事業として実施した。
3. 本書に掲載した遺構図は、井上勇也・九州歴史資料館 岡寺良・太田信行・中野恵美子・平嶋寿敏が作成した。
4. 掲載した遺構写真及び遺物写真は井上が撮影した。空中写真は九州航空株式会社による。
5. 出土遺物の整理・復元、実測・製図作業は福智町教育委員会が主体となり実施した。
6. 本書に使用した方位は第12図（磁北）を除き全て座標北である。
7. 本書の執筆Ⅲ章3を岡寺が他を井上がそれぞれ行った。編集については井上が行った。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	6
III. 調査の概要	12
1. 平成20年度の調査	12
2. 平成21年度の調査	12
3. 西金田地区城山遺跡群における中世城郭遺構について	25
IV. おわりに	27
1. 横穴墓について	27
2. 調査成果の検討	28
3. まとめ	32

挿図目次

第 1 図	福智町の位置	6
第 2 図	城山遺跡群周辺遺跡分布図 (1/25,000)	7
第 3 図	城山遺跡群周辺地形図 (1/5,000)	8
第 4 図	城山遺跡群遺構配置図 (1/1,250)	13・14
第 5 図	墳丘 5 測量図 (1/200)	15
第 6 図	Y124 実測図 (1/60)	16
第 7 図	墳丘 10 測量図 (1/200)	17
第 8 図	Y122 実測図 (1/60)	18
第 9 図	墳丘 9 トレンチ実測図 (1/60)	20
第 10 図	墳丘 9・墳丘 9' 測量図 (1/200)	21
第 11 図	Y133 実測図 (1/60)	22
第 12 図	城山遺跡群中世城郭遺構縄張り図 (1/1,000 九州歴史資料館調査・作図)	26
第 13 図	遠賀川流域の古第三紀層分布図 (長谷川 1991 より転載)	29
第 14 図	遠賀川流域の横穴墓分布図 (遠賀川流域文化財学習会 2007 より転載)	29
付 図	城山遺跡群遺構配置図 (1/500)	

写真目次

巻頭図版	城山遺跡群 (上空から)	巻頭
写真 1	城山遺跡群 (西から)	9
写真 2	城山遺跡群 (東から)	9
写真 3	墳丘 5 盛上状況 (東から)	15
写真 4	墳丘 5 墳裾検出状況 (南から)	15
写真 5	Y124 トレンチ全景 (東から)	16
写真 6	Y124 墓道出土遺物	16
写真 7	Y122 (1 号墳) 左側壁裏上層状況 (南から)	17
写真 8	Y122 出土遺物	17
写真 9	Y122 (1 号墳) 玄門部 (北から)	19
写真 10	Y122 北側斜面調査前 (北から)	19
写真 11	Y122 北側斜面調査 (北から)	19
写真 12	墳丘 9 トレンチ地山検出状況 (西から)	20
写真 13	9 号墳丘出土埴輪	20
写真 14	Y133 入口部 (北から)	22

写真 15	Y133 出土遺物	22
写真 16	Y133 羨道左側壁（西から）	23
写真 17	Y133 羨道右側壁（東から）	23
写真 18	Y94 入口部（西から）	23
写真 19	Y94 羨道上部（西から）	23
写真 20	左 Y 198・右 Y199（東から）	24
写真 21	Y199 入口部（東から）	24
写真 22	Y199 出土遺物	24

表目次

第 1 表	横穴墓指定史跡一覧	27
第 2 表	九州における横穴墓群の規模の比較	28

I .はじめに

(1) 調査の経緯

毎年、福岡県土木部より次年度の事業計画に基づき事業予定箇所における埋蔵文化財の取り扱いについて照会が行われる。その回答を基に田川市郡の工事予定について田川土木事務所(現田川県土整備事務所)と管内の市町村文化財担当者間で連絡会議が設けられている。平成20年6月の連絡会議の席上、前年度の事業計画にはなかった福智町金田の西金田地区急傾斜地崩壊対策事業が提示された。事業対象地は周知の埋蔵文化財包蔵地「城山横穴墓群」であった。工事着工前には発掘調査が必要であり、遺跡の事前確認調査が必要であると回答した。その後、平成20年11月に確認調査に入り、本調査費用積算のための表土厚の確認、遺構の分布調査をおこなった。事業予定範囲内である丘陵西側及び東側の一部斜面において総数200基以上の横穴墓とそれに伴うと考えられる墳丘9基を確認した。また、丘陵頂部では中世山城の可能性が考えられる土塁、平坦面を確認した。事業予定範囲外の丘陵東側斜面においても西側斜面同様横穴墓の存在を確認した。確認調査の成果及び福岡県教育庁総務部文化財保護課の現地視察結果をもとに土木事務所との協議を行った。協議の席上、文化財保護課より早急に記録保存を決定し、工事着工となるのは問題であり、遺跡の保存状態、規模の点で価値が高いと思われることから現状保存の方向性が提示された。この結果を受けて、平成20年度中に文化庁へ状況報告を行うこととなった。福智町としては確認調査後、工事の必要性も考え、工事影響範囲の確認、本調査費用の積算等を行い県、土木事務所、福智町町長部局と協議を続けた。文化庁への状況報告の結果、遺跡の評価に関しては、より詳細な確認調査が必要であるとの見解を提示された。遺跡の現状保存の可能性もあり、平成21年度より2ヵ年工事着工を延期し、その間に国庫補助事業における確認調査を行うことで関係部局と調整、合意した。その後、平成21年3月金田1区公民館においてこれまでの経緯に関する住民説明会を行った。

平成21年度6月、国庫補助事業において確認調査費用を申請し、地元調整を行い調査を開始した。調査期間中には、文化庁調査官による現地視察及び協議を行った。協議において、保存、史跡指定を考えるうえで、調査方針、調査成果について客観的評価を行う必要があり、そのため有識者による調査指導の必要性があることを指摘された。また、次年度以降については正式な調査指導委員会としての位置づけが必要であるとの指摘を受けた。調査中、3名の有識者による調査指導を受け、平成21年度の調査を終了した。

平成22年5月、再び文化庁調査官による現地視察及び協議を行い、その後調査指導委員会を設置した。土木事務所との工事着工、保存についての回答期限が迫っていたため、指導委員会後の7月、文化庁にて保存に向けた協議を行い、協議の結果を基に町内部で調整を行った。最終的には11月に福岡県教育庁総務部文化財保護課を交え保存へ向けた協議を行った。その結果、町長より史跡指定を目指すとの方針が打ち出され、これを受けて平成23年2月調査指導委員会で、保存に向けた今後の方針が協議された。平成22年度までは開発を前提とした確認調査であったが、次年度以降保存目的の確認調査として調査、協議を継続することとなった。

(2) 調査組織

調査組織

調査指導（敬称略・五十音順） 平成 21 年度

小田 富士雄（福岡大学名誉教授）

亀田 修一（岡山理科大学教授）

広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館教授）

藤田 等（静岡大学名誉教授）

調査指導委員会（敬称略・五十音順） 平成 22 年度設置

任期 平成 22 年 4 月 1 日～平成 23 年 3 月 31 日

委員長 小田 富士雄（福岡大学名誉教授）

委員 亀田 修一（岡山理科大学教授）

広瀬 和雄（国立歴史民俗博物館教授）

藤田 等（静岡大学名誉教授）

永末 宏之（福智町文化財専門委員会委員長）

	平成 20 年度	平成 21 年度	平成 22 年度
福岡県田川上木事務所（平成 21 年度 10 月より田川県土整備事務所）			
河川砂防課砂防係			
係長	橋目 隆雄	橋目 隆雄	奥永 毅
担当	小川 正和	中江 克公	中江 克公
福智町			
町長	浦田 弘二	浦田 弘二	浦田 弘二
福智町教育委員会			
教育長	桑野 隆泰	桑野 隆泰	桑野 隆泰
			嶋野 勝
			（平成 22 年 8 月より）
生涯学習・人権同和教育課（平成 22 年 7 月より生涯学習課）			
課長	森山 豊	辻村 哲弥	辻村 哲弥
主管		原口 慎一郎	原口 慎一郎
			（平成 22 年 6 月まで）
係長	原口 慎一郎		中尾 勉
主査（経費執行事務）		長野 士郎	長野 士郎
主任主事（担当）			井上 勇也
主事（担当）	井上 勇也	井上 勇也	

発掘調査、整理作業に参加された方々は下記のとおりである。記して感謝いたします。

発掘作業員・整理作業員（敬称略・五十音順）

相原勲、池田太一郎、石井康文、太田信行、木村玉美、坂田純平、櫻木裕子、高田由美子、中野恵美子、平嶋寿俊、藤江理智、藤川岳久、藤林純、松田哲幸、松田福子、松田泰昌、松本和代、永末良一

調査にあたって、文化庁記念物課においては現地視察、協議に際し有益な御助言・御教示をいただいた。福岡県教育庁総務部文化財保護課小池史哲、小田和利、吉村靖徳、吉田東明、岸本圭、小澤佳憲、宮地聡一郎の各氏においては随時調査、協議に参加していただき有益な御助言・御教示をいただき町内部の調整にご尽力いただいた。

現地調査においては九州歴史資料館岡寺良氏、地元住民ほか関係各位に多大な御理解と協力を得た。また、多くの方々に調査・報告書作成において、有益な御助言・御教示をいただいた。感謝いたします。

（3）現在までの協議の経過

平成 20 年度

6 月 22 日

福岡県田川土木事務所と連絡会議

- ・西金田地区急傾斜地崩壊対策事業の文化財照会

8 月 9 日・25 日・28 日

福岡県田川土木事務所とボーリング調査立会

- ・ボーリング地点の確認と表土厚の確認

11 月 5 日～28 日

現地に横穴墓の分布状況等の確認調査

- ・横穴墓群の現状把握・調査費積算のための表土厚確認

総数 201 基の横穴墓、墳丘、中世山城等の遺構を確認、平均表土厚を把握。

11 月 14 日

福岡県教育庁総務部文化財保護課現地視察

- ・保存の方向性を提示

12 月 7 日

福岡県田川土木事務所と連絡会議

- ・西金田地区急傾斜地崩壊対策事業について本調査の概算及び確認調査報告書を提出

1 月 26 日

福岡県田川土木事務所と連絡会議

- ・土木事務所より工法の説明と工事影響範囲の確認

丘陵西側斜面はほぼ全面において影響を受け、遺跡の保存が不可能であることを確認。

1月27日

福智町関係課長会議

- ・確認調査後に工事着工か、遺跡の保存か判断を行うことについて、協議の末合意
課長より福岡県教育庁総務部文化財保護課からの意見を求められる。

2月9日

福岡県教育庁総務部文化財保護課と福智町関係課長会議

- ・福岡県教育庁総務部文化財保護課より遺跡の現状、県の見解説明
確認調査後に工事に着手するか、保存するか取り扱いについて判断することを確認。

2月26日

地元区長と確認調査について協議

3月24日

住民説明会

- ・確認調査への協力依頼と工事について説明
確認調査及び工事着工の延期について地元合意を得た。

平成21年度

5月

地権者及び地元住民へ調査の説明

7月21日～3月31日

確認調査

- ・城山遺跡群の内容把握のため、発掘を伴う確認調査を実施

9月9日

文化庁記念物課現地視察、協議

- ・今年度調査範囲の確認、今後の調査について協議
横穴墓群の時期把握、構造に絞り調査を行うことを確認。

10月6日～11月27日

有識者による現地視察

- ・今年度調査範囲の確認、今後の調査について協議
現地視察の中で下記の点について追加調査の必要性を指摘された。
 - ・進入可能横穴墓の調査と分布空白部分での横穴墓確認の必要性。
 - ・墳丘5の墳裾確認の必要性。
 - ・横穴墓の面的調査と調査対象横穴墓の拡大の必要性。
- 上記の指摘を受け残りの調査期間を考え、下記の項目を調査内容に追加した。
- ・Y122 北側斜面においてトレンチ調査を行い、分布空白域の横穴墓確認を行う。
 - ・Y124 上部盗掘孔で墳丘5の墳裾確認を行う。
 - ・進入可能横穴墓の部分実測、写真撮影による記録作成、遺物採集。

平成 22 年度

5 月 13 日

文化庁記念物課現地視察、協議

- ・今年度の調査及び協議について確認
他遺跡との比較検討、協議に重点を置く必要性を指摘される。
資料収集のための追加確認調査は必要に応じ行う方針を確認。

5 月 31 日

第一回城山遺跡群調査指導委員会開催

- ・城山遺跡群の評価について
現状で城山遺跡群は保存の価値のある遺跡との評価を得る。
今後の課題として、国指定への条件を考慮し補足調査を行う方向性を示される。

7 月 12 日

文化庁にて調査指導委員会の状況を報告、協議を行う

- ・遺跡の重要性の確認
地域の活性化の側面から保存を考える必要性を指摘される。

11 月 24 日

福岡県教育庁総務部文化財保護課と町長部局及び教育委員会との協議

- ・城山遺跡群の取り扱いについて
町長より現状保存の見解が示される。

11 月 28 日

九州考古学会にて城山遺跡群について発表

- ・城山遺跡群の調査概要について発表を行った

2 月 9 日

第二回城山遺跡群調査指導委員会

- ・城山遺跡群の来年度以降の調査及び体制について
調査について、現状の調査成果では構造、プラン等に偏りがあり、不明な点が残されている。
調査後の普及、活用に際し提供できる資料収集の視点も必要であると指摘される。
課題達成のためには、完掘に近い形での遺構の調査と部分的な調査によるデータ集積を平行して行う必要性を指摘。
現状の体制では不十分であると考えられ、調査に当たる体制作りの必要性を指摘される。

Ⅱ 位置と環境



第1図 福岡市の位置

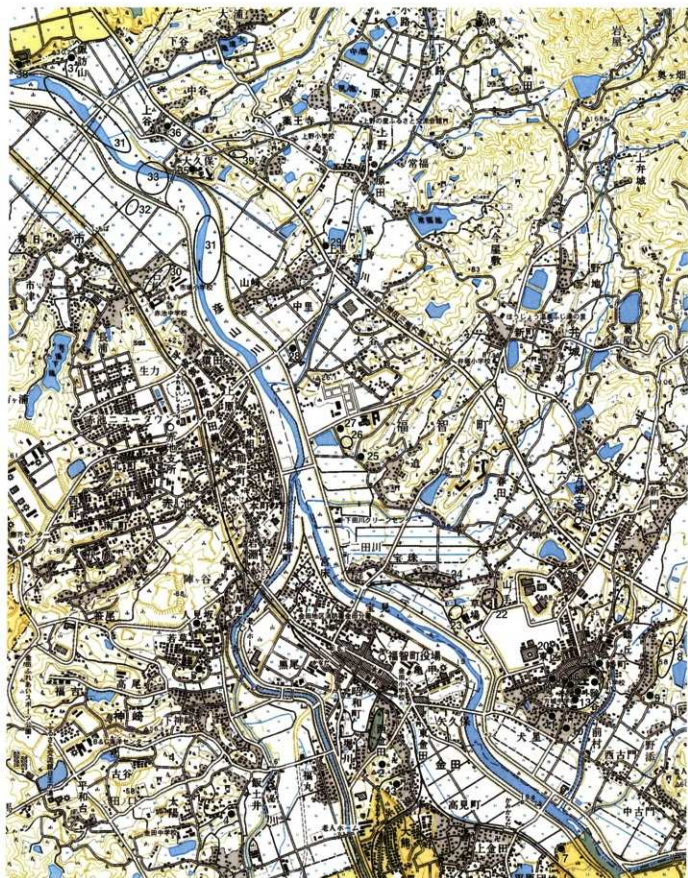
城山遺跡群は福岡県の中心部を流れる遠賀川の支流のひとつ中元寺川の右岸、標高21m～39mほどの独立丘陵上に位置する。遠賀川の中流域に含まれる地域であり、福岡県下でも横穴墓集中地帯として知られている地域である。城山遺跡群は古くからその存在が知られ、30～40基程度の横穴墓群であり、町史には赤色顔料の記載もあり装飾を持つ横穴墓が存在する可能性も指摘されていた。

この遺跡の所在する福岡市は福岡県の中央部、田川郡の北端に位置し、平成18年3月6日赤池町、金田町、方城

町の三町が合併し誕生した。北は福岡山系を挟んで北九州市、南は田川市、糸田町、東は香春町、西は直方市、飯塚市に隣接する。町の北側は福岡山を中心とする山岳地帯であり、起伏に富んだ地形である。南側には福岡県第二位の河川として知られる一級河川遠賀川の支流、中元寺と彦山川が合流し、西へ流れ出る。現在の人口は約26,000人、観光、教育をはじめとする人の活力を生かした町作りを展開している。文化的には、400年の歴史を誇る上野焼に代表される陶芸の里、童謡作曲家の河村光陽生誕の地として全国的に有名である。

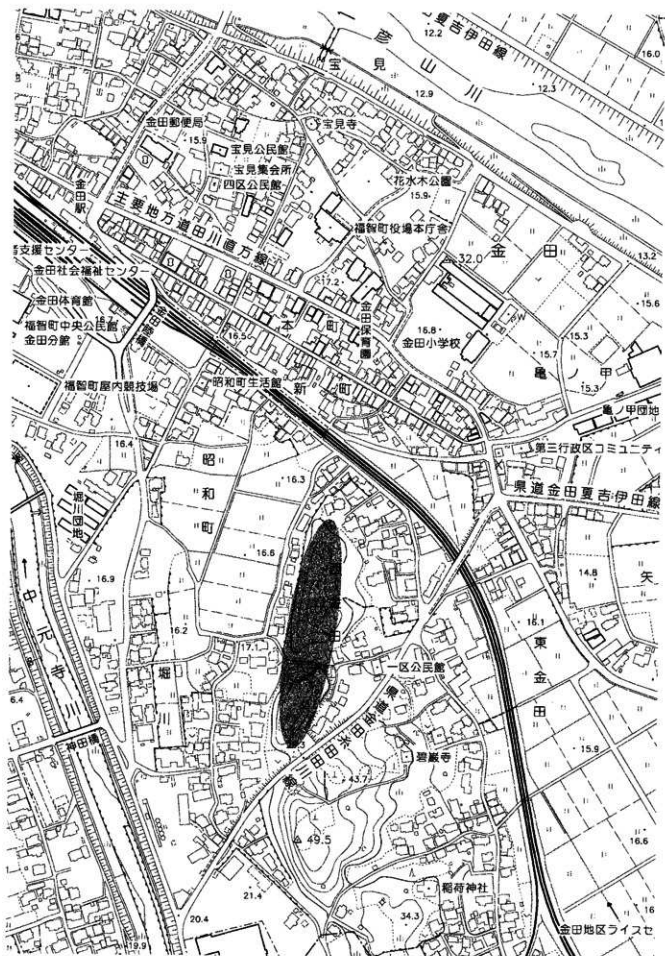
福岡市の歴史的環境であるが、国の登録文化財1件、県指定文化財8件、町指定文化財が15件と指定、登録文化財だけでも22件を数え、他にも多くの文化財が所在し地域の歴史に触れる材料が豊富な土地である。

町内でもっとも有名な文化財は登録文化財の九州日立マクセル赤煉瓦記念館や、県指定文化財を3件所有する上野興国寺であろう。前者は旧三菱方城炭鉱時代の建物であり築100年を越え、内部は社員用の喫茶室、展示場として現在も活用されている。この赤煉瓦の建物は敷地内に残る他の赤煉瓦建物とともに、かつて炭坑で栄えた筑豊の近代化遺産を象徴する存在となっている。上野興国寺は足利尊氏が九州へ逃れた際に隠れたとも伝えられ、尊氏、直義兄弟発願の安国寺の一つである。古文書、仏殿（観音堂）、木造玄晦禅師坐像は県指定文化財に指定されている。また、町内には県下でも有名な天然記念物であるエドヒガンの虎尾桜、定禅寺境内の迎接の藤と呼ばれる藤がある。虎尾桜は福岡山の中腹にあり、そこにいたる道は幾分険しいものの毎年盛りになる



第2図 城山遺跡群周辺遺跡分布図 (1/25,000)

1. 城山遺跡群 2. 東金田横穴 3. 玉穂山古墳 4. 飯土井古墳 5. 神崎遺跡 6. 人見古墳群 (神崎1号墳) 7. 和田山横穴群
8. 野添遺跡群 9. 高崎山古墳 10. 法華屋敷遺跡 11. 前村遺跡 12. 伊方遺跡群 13. 伊方城郭遺跡 14. 伊方小学校遺跡第1地点
15. 伊方小学校遺跡第2地点 16. 伊方小学校遺跡第3地点 17. 伊方石丸遺跡 18. 伊方古墳 19. 後谷遺跡
20. 九州日立マクセル赤煉瓦記念館 21. 長谷横穴墓群 22. 三本松古墳群 23. 草場遺跡 24. 宝珠遺跡 25. 迫遺跡
26. 迫横穴墓群 27. 迫古墳 28. 板取遺跡 29. 宮ノ馬場遺跡 30. 石松遺跡 31. 市津川床遺跡 32. 市場平石遺跡
33. 鋤木田川床遺跡 34. 草場川床遺跡 35. 祓元遺跡 36. 鋤木田古墳 37. 眞訪山遺跡 38. 国境石 39. 那岐野丘遺跡
40. 上野興国寺



第3図 城山遺跡群周辺地形図 (1/5,000)



写真1 城山遺跡群（西から）



写真2 城山遺跡群（東から）

と多くの見物客が訪れている。このエドヒガンは希少種の桜であるが、町内の福智山山麓には九州でも例がない密集地帯として有名である。

福智町では、古く縄文時代より人々が生活していた痕跡が残されている。明確な集落は未確認であるが、金山遺跡、長浦遺跡では縄文時代の遺物、遺構が確認されている。数点ではあるが、縄文時代早期から前期の縄文土器も出土し、古くからこの地で人々が暮らした痕跡が残されている。特に金山遺跡では縄文時代後期から晩期の石器製作址と考えられる遺構が確認され、周辺に縄文時代集落が存在した可能性を示唆した。

弥生時代は、遠賀川流域では立岩遺跡や立屋敷遺跡といった学史に残る遺跡も多く確認されている。立岩遺跡では10面の前漢鏡が出土した集団墓が確認され、弥生時代のクニの存在が明らかとなっている。また、そこで生産された石包丁は北部九州に広く分布し、生産地としても立岩遺跡は全国的に有名である。彦山川流域では北部九州の弥生時代研究の資料として知られる下伊田式土器の由来となった下伊田遺跡群などが存在する。町内では彦山川、中元寺川の河岸段丘に生活の場が移り、伊方丘陵やその周辺、神崎などで生活の痕跡や墓地在確認されている。特に伊方丘陵やその周辺は弥生時代から古墳時代にかけて主要な生活の場であったと考えられ、町内でも有数の遺跡密集地帯である。弥生時代後期末から弥生時代終末と考えられる宝珠遺跡の石棺墓から内行花文鏡が出土し、ほぼ同時期と推定される三本松古墳群からも同じく内行花文鏡が出土している。このことは、有力者の存在を連想させ、後の伊方古墳と並び周辺地域の中でも中心地であったことがうかがわれる。青銅器は弥生時代においては有力者層の存在を想定できる資料である。彦山川流域では上流域の大任町で銅剣が、隣の糸田町では青銅製武器類が、香春町では宮原遺跡で青銅鏡が出土しそれぞれの地域において有力者層の存在が想定される。

古墳時代であるが、古墳時代前期から中期にかけては各地で前方後円墳が首長墓に採用される時期である。遠賀川流域においても上流の嘉麻市所在の沖出古墳や下流の遠賀町所在の烏津・丸山古墳群などの前期の前方後円墳が築造される。町内の古墳時代前期の古墳は迫古墳が知られる。主体部は粘土郭で覆われた木棺で、副葬品等は出土しないが、形態から前期古墳と位置づけられている。町内では以後目立った古墳の造営は行われていないようである。神崎遺跡では前期と考えられる石棺墓が確認されている。

古墳時代中期は前方後円墳が各地で築かれるとともに巨大化していく。また、横穴式の墓制が日本に導入された時期に当たる。流域の田川市ではセスドノ古墳、猫迫古墳という2つの古墳が営まれる。セスドノ古墳は朝鮮半島との関連が伺える横穴式石室を持ち、猫迫古墳は古墳時代中期の資料が少ない遠賀川流域の中で九州最古級の馬型埴輪などが出土し全国的にも有名である。また、5世紀後半には豊前北部で横穴墓の築造も開始される。行橋市の竹並遺跡群や中津市の上の原横穴墓群に5世紀代にさかのぼると考えられる横穴墓が確認されている。町内では古墳時代中期には目立った古墳の造営もなく、現在確認できる横穴墓は5世紀末から6世紀の前半であり、不明な点が多い。

古墳時代後期になると各地で群集墳が築造される。福智町の位置する遠賀川流域は地質的な影響から横穴墓が群集墳として数多く造営される。町内でも例外ではなく数多くの横穴墓が造営され、今回報告を行う城山遺跡群も主体は横穴墓群である。横穴墓群の数に反比例して横穴式石室を内部主体にもつ古墳の数は少ない。町内で確認されている後期古墳はわずか数基である。遠

賀川流域においても横穴式石室を内部主体とする古墳群は横穴墓群に比べ数は少ない。一部、宮若市のように横穴式石室墳が群集墳の主流となる地域もあるが、主流は横穴墓である。その中でも伊方古墳は墳丘径約 32 m、内部の横穴式石室は全長 12 m を超え福岡県下でも有数の規模を持つ巨石墳である。保存整備に先立つ発掘調査の結果、少ないながらも金銅装の馬具等が確認され、地域首長の古墳であると考えられる。また町内では、神崎 1 号墳出土の獅噬環柄頭という優れた副葬品が出土している。獅噬環柄頭は全国的にも類例は少なく貴重な遺物である。神崎 1 号墳は周辺の状況から横穴墓の可能性もあり、そうであるなら首長墓に準ずる階層の横穴墓採用という横穴墓集中地域としての地域性の現れとして重要である。上流域の飯塚市では金銅装の帯金具などの豪華な副葬品が出土している樋山古墳が横穴墓と考えられている。遠賀川流域では、横穴墓という墓制が有力者層にも採用されていたことが想定できる。

古墳時代の集落であるが、現在のところ目だった集落の遺跡は発見されていない。町内だけでも古墳時代後期の群集墳は、横穴墓を中心に数百基存在すると考えられるが、現在までのところ、これら群集墳の造墓主体となる集落は確認されていない。古墳時代の上層が伊方丘陵の裾部や赤池の川底で発見されている。今後調査が進めば伊方の丘陵部や赤池の河岸段丘上などで集落が発見される可能性がある。

古代では伊方城岡遺跡で掘立柱建物等が確認されている。また伊方の地名はその後伊方荘として文献にも散見され、伊方城岡遺跡では鎌倉時代の建物も確認され、伊方石丸遺跡でも同時期の井戸が確認されている。伊方周辺は中世まで地域の中心地として人々が生活していたことが伺える。また上野興国寺は、室町時代に安国寺として創建され現代に続く古刹である。先に述べたように、足利尊氏の伝承も残り、近世豊前に入封された小笠原藩ゆかりの寺でもある。幕末には小笠原藩 9 代藩主の葬儀もここで行なわれた。

近世の周辺地域は細川氏、小笠原氏によって取められた豊前の地であった。彦山川流域でも手永（大庄屋）と呼ばれる家が周辺の年貢の管理などを行っていた。その中でも金田手永六角家は有名である。現在の母屋は後世のものであるが、六角家には藩主が通る専用の門である御成門のある白壁、土蔵などが残り往時の姿をとどめている。城山遺跡群はこの六角家の裏山であり、敷地の一角として手付かずのまま残されたといえる。遺跡群の頂部には累代の近世墓も残っている。

近代は、周辺を含め筑豊地区全体が炭鉱とともに発展して行った。町内でも三菱方城炭鉱、明治赤池鉱業所など大手資本による大規模炭鉱をはじめ、数多くの中小炭鉱が創業し活気にあふれていた。現在ではボタ山等にわずかにその面影を残すのみとなっている。三菱方城炭鉱の赤煉瓦建物群は現在九州口立マクセルの敷地内に数棟残り、登録文化財の九州口立マクセル赤煉瓦記念館を始め今でも活用され、筑豊の近代化を物語る資料として筑豊の歴史を見守っている。

Ⅲ. 調査の概要

1. 平成 20 年度の調査

開発に先立つ事前調査として今後の調査期間と調査費用の積算のため丘陵上の遺構分布調査及びトレンチ調査による表土厚の把握を目的として調査を行った。

その方法は土木事務所提供の地形測量図に確認遺構を記入するとともに部分的にトレンチを掘削し表土厚及び遺構を確認した。

調査の結果をもとに掘削上量を算定し本調査費の積算を行った。

遺構密度については表土厚から考え、埋没遺構が多数存在すると考えられることから、横穴墓数は既知の数よりも増加する可能性が考えられる旨を付加した上で確認調査報告書を作成、福岡県田川土木事務所へ提出した。

2. 平成 21 年度の調査

(1) 目的

城山遺跡群についての内容把握のため、以下のように調査の目的を設定した。

- ・丘陵全体の地形測量及び各墳丘の地形測量
- ・遺構の部分的な発掘調査および現況での横穴墓の構造把握、時期変遷の把握
- ・横穴墓の分布空白域における横穴墓分布状況の確認
- ・上部に存在する中世山城の調査

(2) 調査の方法

調査の方法については、先述の目的達成のため下記の方法による調査を行うこととした。

①墳丘を持つ横穴墓である Y124 の玄室内調査による内部構造の把握、及び上部の墳丘 5 の削平面での盛土状況確認。トレンチ調査による墓道部の確認。

②墳丘 10 に伴う Y122 について、現状で石材が散乱し石室墳の可能性が考えられるため、陥没部分のトレンチ調査による内部主体確認。

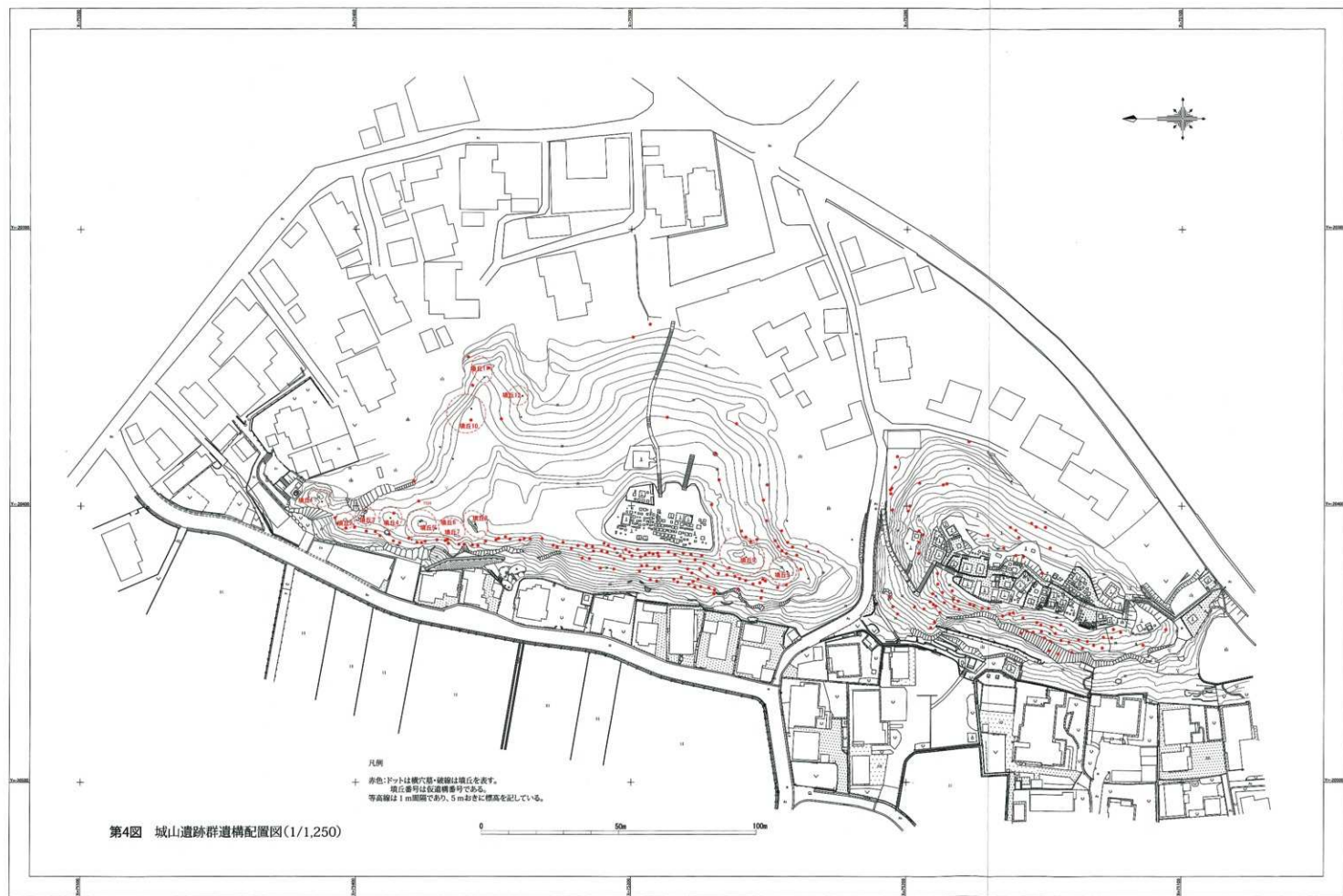
③南側丘陵の Y133 について、『金田町史』に赤色顔料の記載があり、玄室内調査による内部構造の把握と赤色顔料の確認。トレンチ調査による墓道部の確認。

④墳丘 9 について、前方後円形を呈し、埴輪片が採集されるため、トレンチ調査による埴形確認。

⑤ Y122 北側斜面において、斜面の表土除去およびトレンチによる横穴墓の有無確認。

⑥横穴墓の構造確認のため進入可能横穴墓（Y94、107、198、199）における部分実測、写真撮影。

平行して基礎資料となる丘陵全体の地形測量を 1/500 で行い、横穴墓の分布状況を図化した。併せて埴丘について 1/200、20cm 間隔の等高線にて測量を行い、また横穴墓群上部に存在する中世山城については、範囲確認のため縄張図を作成した。

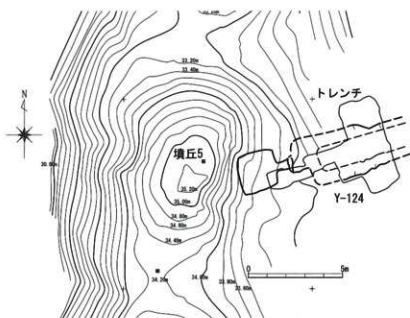


(3) 調査成果

① Y124・墳丘5

墳丘5 (写真3・4、第5図)

後世の削平面を清掃し墳丘盛土の土層状況を確認した。調査の結果、墳丘の盛土は横穴墓掘削時の残土を利用したと考えられる。地山掘削土を積上げたと思われるが、版築等の痕跡は確認できなかった。基盤層である砂岩層を掘削して生じた混砂土層を積上げた単一層であり、上層は表土層である。盗掘孔の断面観察の結果、墳裾部を確認している。墳丘規模は東西約 10.1 m、南北約 10.4 m である。



第5図 墳丘5測量図 (1/200)



写真3 墳丘5盛土状況 (東から)



写真4 墳丘5墳裾検出状況 (南から)

Y124 (写真5・6、第5・6図)

前面のトレンチにおいて墓道を確認し横穴墓入り口部の掘り下げを行った。前方トレンチでは、後世に形成された表土層が墓道部まで堆積しており、近世陶磁器片、中世の青磁片などを包含していた。この層は除去し、墓道部の部分的掘り下げを行った。トレンチ西壁（横穴墓入り口部側）では若干層位の違いが認められ、改めて土層観察を行った。表層とその下に続く黒色層、3層目の褐色土は後世の堆積と考えられる。最下層は3層目と同質であるが、やや暗い色調のため4層目として分離した。墓道部半裁の結果、墓道部にはトレンチ西壁で確認したの4層目が続き、墓道床面まで同一層である。古墳時代以降に堆積した可能性もあるが、この層中から出土する遺物は古墳時代の物がほとんどである。時期幅があり、分層できないため初葬時の遺物、追葬時の遺物等の分離は不可能だが最も古い物で5世紀末から6世紀前半と考えられる須恵器を確認し

ている。墓道は深さ約 0.8 m、幅は肩部付近で約 2.0 m である。一墓道一墓室の形態をとると考えられるが、調査部分において墓道部での祭祀、追葬の確認はできていない。



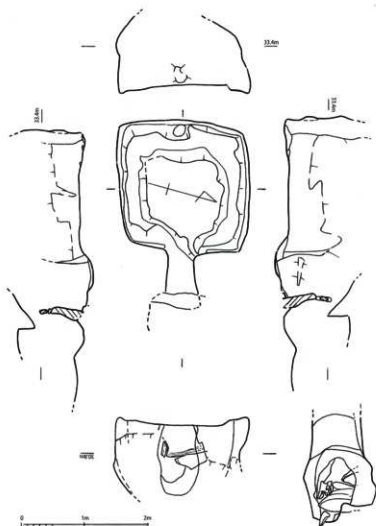
写真5 Y124 トレンチ全景 (東から)



写真6 Y124 墓道出土遺物

玄室内であるが、入口部は閉塞石が残存しており侵入ができなかったため、内部へは上部の盗掘孔より侵入した。

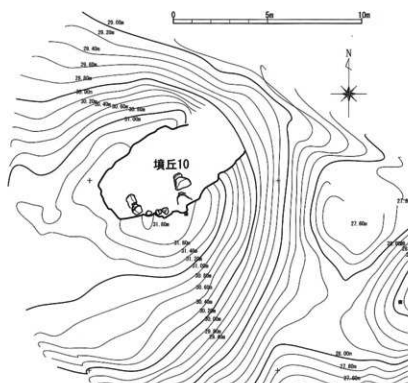
玄室内の状況であるが、床面から 1m 程度まで崩落土により埋没していた。その崩落土を除去し玄室内の調査を行った。玄室は壁面及び天井部の崩落、床面の部分的かく乱等はあるものの比較的死存状態は良い。プランは約 2m の方形のプランで、床面は四周に排水溝が巡る。中央部は段状に高くなり敷石は検出していない。天井部、壁面共に軒先線等はなく天井部形態はドーム型である。玄室内から遺物は検出していない。主軸方位は S -75° - W



第6図 Y124 実測図 (1/60)

であり、東向きに開口する。

養道部は玄関部で幅0.4 mほどであり、長さ1 mほどである。閉塞状況は板石による閉塞が確認でき、1枚の板石を用い間隙を拳大よりやや大きな礫を用い充填している。板石上部は欠失し確認できない。板石は養道の入り口部分にある脛石上の石材の上に置かれている。



第7图 填丘10測量図(1/200)

② Y122·墳丘 10 (1号墳)

(写真7~9、第7・8図)

填丘中央部に陥没部分が確認でき、陥没部分の形態から東側に開口すると考えられ、西半部分をA、B、東半部分をC、DとしてA～Dの4区画に分割し、奥壁想定部分であるA区の掘下げから開始した。

トレンチ調査結果、奥壁と
考えられる腰石及び敷石を部
分的に検出、石材の裏込を確
認し石室と認定した。A区の石
材検出時点ではプラン、主軸
は確定できていなかったがそ
の後調査指導を受け、陥没部
分を再度掘り下げた。結果、C
区において袖石と考えられる

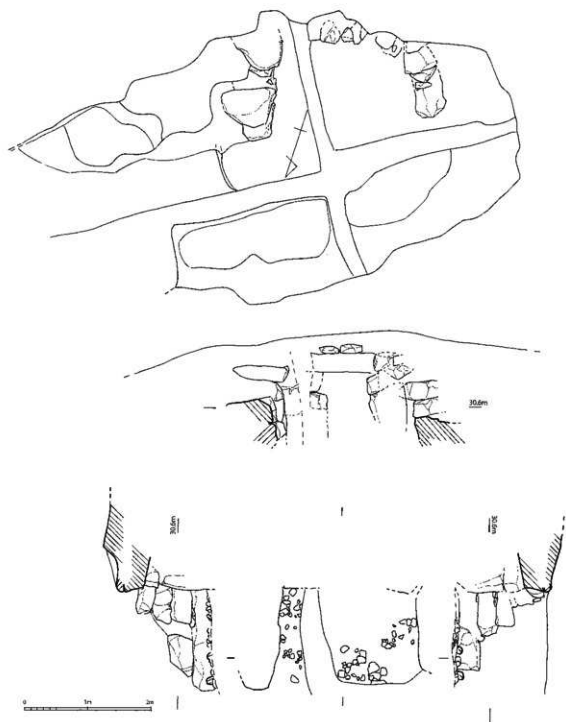
石材を検出、その石材より東側で羨道の床面と考えられる硬化面を確認した。結果、東に開口する単室の横穴式石室と推定した。左側壁推定部分には石材が検出できる可能性があるため、再度掘削可能範囲において石材の検出に努めた。袖石と推定する石材の南側に石材を確認、石室隅部を検出した。隅部から伸びる石材は明確には 1 列しか確認できていないが、東側開口であるならば、片側のいづつな石室となる。石材確認後に、南側開口の可能性について指摘を受け、石室



写真7 Y122(1号墳)左側壁裏土層状況(南から)



写真8 Y122出土遺物



第8図 Y122 実測図 (1/60)

南側の更なる確認を行った。

調査の結果、開口部を確認、プランは右側壁側がやや膨らむ単室の横穴式石室である。規模は幅約 2.2 m、長さは石材の抜取り跡から推定し約 2.6 m ほどである。残存状況は悪く石室は 1/3 程度しか残存していない。羨道部は未調査である。主軸方位は S・19°・W であり、南西方向に開口すると考えられる。



写真9 Y122 (1号墳) 玄門部 (北から)

敷石は現状で2面確認できる。下層の敷石上より須恵器坏身を検出している。その他の出土遺物として耳環、鉄鏃等がある。下層敷石上からの出土遺物であり、石室は石材の抜き取り等で荒らされているものの初葬時に近い遺物と考えられる。形態より6世紀後半から末の特徴を持ち、初葬はこの時期前後と考えられる。

石室は、基底面を赤褐色の粘性土で成形し、腰石を据えている。この基底面は貼床状になりかなり硬い。調査の性格から墳丘の断ち割りな

どは行っていないため、掘り方は明確には検出していない。腰石から2段目の石材の下部にかけて裏込に赤褐色の粘性土を充填し、その上に墳丘盛土を積んでいる。墳丘盛土は観察できる部分で黒色土と赤褐色土の互層が確認できる。盛土の方法は横穴墓の墳丘盛土とは明らかに異なり、断面観察が行える墳丘では明確に区別できる可能性がある。石室の基底面は、石室外に広がる様相があり墳丘の基底面（地山成形後の造成面）と同一と考えられる。



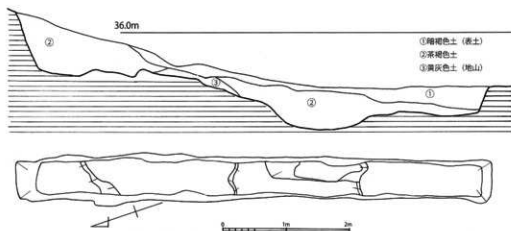
写真10 Y122 北側斜面調査前 (北から)



写真11 Y122 北側斜面調査 (北から)

③ Y122 北側斜面 (写真10・11)

Y122 北側斜面でトレンチ調査を行った。竹木伐採後、斜面を清掃し、表土を除去後、斜面下部に幅1mのトレンチを設定し掘り下げを行った。地山検出時点で掘削を止め、地形の保存に極力注意を払った。結果、地山が東側に向かい急激に落ちていく状況が確認できた。そのため本来の斜面はさらに埋没している可能性もある。斜面下部の表土を完全に除去しないと旧地形の確認はできないと考えられ、今回の調査期間中で表土の完全除去は困難であった。そのため隣接地の開口横穴墓の上端付近のレベルまで確認を行い調査終了とした。調査した部分では、横穴墓は確認されなかった。調査終盤において部分的に深く掘り下げを行ったが、ここでもやはり横穴墓は検出できていない。隣接する斜面では横穴墓が開口しており、分布の空白が何を意味するのかは現在検討中である。意図的に横穴墓を構築しなかった可能性も考えられ、群構造把握のため分布空白域における横穴墓確認を継続する必要があると考えられる。



第9図 墳丘9トレンチ実測図 (1/60)



写真12 墳丘9トレンチ地山検出状況 (西から)



写真13 墳丘9出土埴輪

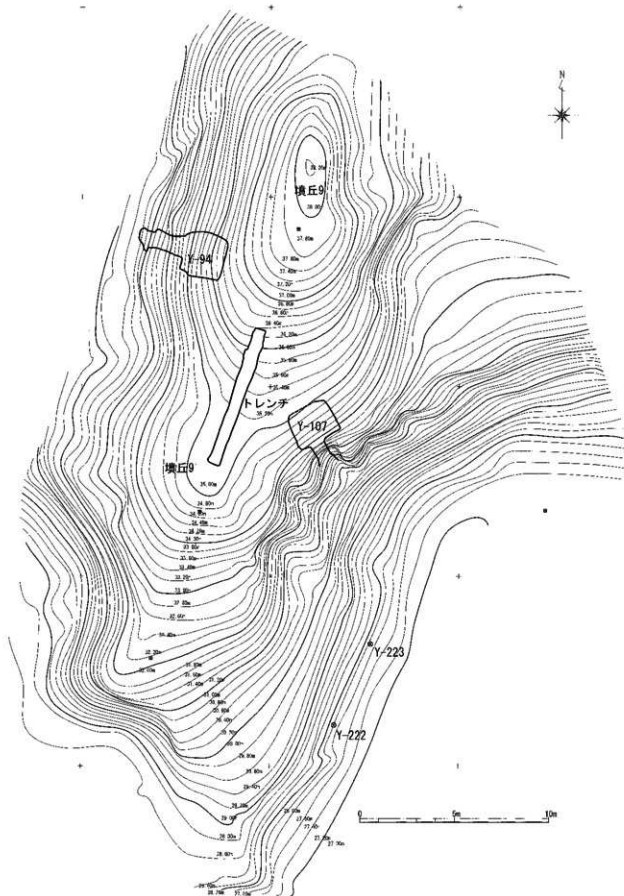
④墳丘9 (写真12・13、第9・10図)

トレンチの設定箇所は、北側の円丘部分の裾部から南側の方丘頂部にかけての部分である。幅0.6m、長さ7mほどの範囲である。後円部と推定される円丘の裾部付近で地山と同質の土を検出した。その前後は表層と同じ黒褐色土であるがややしまりのある層を確認している。この円丘の裾部は溝状に低くなり、この低い部分から円筒埴輪片が出土した。円筒埴輪は円丘上から流れ落ちた可能性があるが、溝状に地山が切れる部分は地山成形面であろう。結果ここまでが墳丘の範囲であり、前方後円形の墳丘にはならないと考えられる。一方、前方部を想定した部分では、頂部で一旦地山の落ち込む部分があり、もう一つ墳丘が存在する可能性がある。後世の改変のせいか現状で一つに見える墳丘は二つの墳丘がつながったものであろう。北側を墳丘9、南側を墳丘9'とした。円筒埴輪片は墳丘9の東側でも表採しており、墳丘上に樹立された可能性もある。

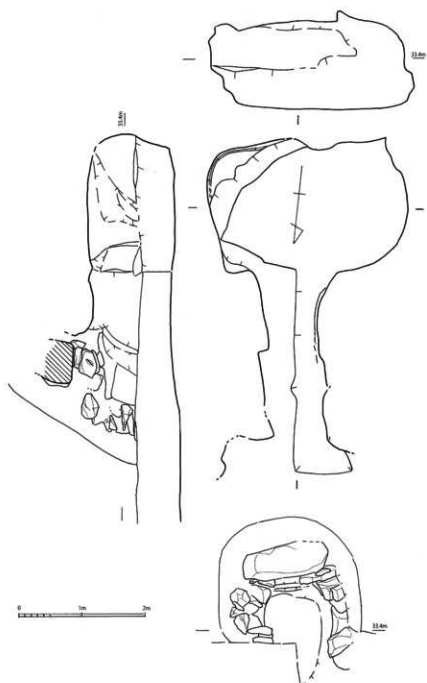
⑤Y133 (写真14～17、第11図)

入口部前面がテラス状となり墓道部の残存が想定された。また、入口上部に石材が確認できたことから入口部の確認、墓道部にトレンチを設定し調査を開始した。

調査の結果、墓道部、羨道、玄室とも床面は後世に攪乱を受け、0.6m程掘り下げられていた。



第10図 墳丘9・墳丘9'測量図 (1/200)



第11図 Y133実測図 (1/60)



写真14 Y133入口部(北から)



写真15 Y133出土遺物

玄室内の左側壁において隅部に旧床面が一部残存していた。残存部から推定した規模は玄室幅約 2.8 m、長さ約 2.1 m の横長の長方形プランであり、高さは約 0.75 m と低い。天井部形態はドーム型である。主軸方位は N - 5° - E であり、ほぼ北向きに開口する。

羨道部は素掘りであるが、羨門部は地山を削りだし、その上部に石材を 3 段ほど積みさらに底石が乗る。石材は羨門外では 1 列確認できる。この部分は地山面から積み上げている。羨道部は幅約 1.0 m、底石の下部までで長さ約 1.8 m、羨門外の石材までで長さ約 2.65 m である。

玄室内、羨道部ともに赤色顔料や工具による装飾の痕跡は認められなかった。

墓道は推定で深さ 0.4 m と浅い。幅は入口左側が大きく攪乱を受け不明であるが、入口右側部分で墓道の肩部付近が残存する。トレンチ範囲内ではあるが、隣接する横穴墓と墓道を共有する様相はない。



写真 16 Y133 羨道左側壁（西から）



写真 17 Y133 羨道右側壁（東から）

⑥ Y94、Y107、198、199

Y94（写真 18・19）

羨門部の石積が特徴的であり、構造把握のため入口部のみ調査を行った。羨門の石積は入口の床面から石を積み、上部に底石を置く。石材のみを見ると石室入り口部のような錯覚を覚える。しかし、石材は入口から 2 列程度でありその奥は地山を削りだした横穴墓の羨道が続く。玄室内は天井部が崩落し、大半が埋没している。玄室内の掘削は行っていない。玄室は現状床面での実測から、幅約 2.25、長さ約 2.35 m の方形プランであり天井部形態はドーム型である。高さは現状で 0.64 m である。床面は未調査のため、玄室高はやや高くなるであろう。主軸方位は N-74° - W であり、西向きに開口する。羨道部は幅約 1.1 m、長さ約 1.3 m である。



写真 18 Y94 入口部（西から）



写真 19 Y94 羨道上部（西から）

Y107

玄室内は大半が埋没しているが、進入が可能なため現状床面での実測のみ行った。羨道部は他の横穴に比べやや長く、奥壁に向かいやや左寄りに掘削されている。玄室規模は現状床面での実測より、幅約 2.35 m、長さ約 1.95 m の方形に近いプランであり、天井部形態はドーム型である。主軸方位は S - 29° - W であり、南向きに開口する。羨道は幅約 0.85 m、長さ約 1.2 m である。

Y198 (写真 20)

Y199 号の南側に開口する横穴である。羨門部の石積等の施設はなく小型横穴墓と考えられた。内部への侵入が可能なため内部の現状床面での実測を行った。玄室は幅約 1.4 m、長さ約 1.8 m、高さは床面が未調査であるが 1.13 m である。天井部形態はドーム型である。玄室規模は後述する Y199 とほぼ同規模である。主軸方位は N - 78° - E である。羨道部は玄門部で幅約 0.9 m、羨門部で約 0.6 m、長さは約 1.4 m である。

Y199 (写真 20 ~ 22)

羨門部の石積が特徴的であり、その入り口部の残存状態が良いため、入口部から羨道部にかけて調査を行った。羨道部の調査中羨道左側でまとまって遺物が出土した。床面に閉塞石が倒れていたので除去後遺物を取り上げた。閉塞石は一枚の板石である。玄室内は大半が埋没しており床面は未調査であるが、遺物の出土したレベル付近では扁平な石材が確認でき、敷石の可能性もある。玄室は現状床面での実測より、幅約 1.6 m、長さ約 1.8 m、高さは床面が未調査であるが 0.83 m であり、天井部形態はドーム型である。主軸方位は S - 78° - W である。羨道部は玄門部で幅約 1 m、羨門部で約 0.8 m、長さは庇石の下まで含め約 1.7 m である。



写真 20 左 Y198・右 Y199 (東から)



写真 21 Y199 入口部 (東から)



写真 22 Y199 出土遺物

3. 西金田地区城山遺跡群における中世城郭遺構について

(1) はじめに

福岡県田川郡福智町西金田の城山遺跡群は、一定の規模を持って良好に残された古墳時代の横穴墓群であり、現在、福智町教育委員会によって調査が進められているが、その調査の途上、地表面の状況から中世城郭として改変されている可能性が考えられた。中世城郭としての評価について、調査依頼を受けた九州歴史資料館では、学芸調査室の岡寺が担当して、2010年3月に2日間かけて現地での城郭遺構の検討を行うと共に、縄張り調査を行い図面を作成した。

ここでは、検討時に作成した縄張り図(第12図)を元に、城山遺跡群における中世城郭遺構の状況とその性格・年代について述べることにしたい。

(2) 城郭遺構の状況

城山遺跡群が位置する標高約40mの丘陵の頂部(図中I)には、東西約20m、南北約30mの平坦面があり、現在、東麓の六角家の近世以来の墓地群となっている。Iの南側には横穴墓群の墳丘が見られるが、平坦面との間のaは、窪んでいて堀切状となっている。また、Iの北側には東西約20m、南北約30mの平坦面IIがあつて、その北側のbは、土塁状となり、平坦面IIIへと続いている。西側斜面下には横穴があることから、連続する墳丘同士を埋めて上塁状していると見られる。その北側には、堀切状のcがあり、IIIの東側は一部土塁状となつて、北側からの侵入に対しての障壁となっている。cの北側については、残存する墳丘がいくつもあつて、地形は不明瞭となり、城郭遺構として地形を読み込むのは非常に困難である。ただ、それらを城郭遺構として積極的に読み込むならば、墳丘と墳丘の間の窪みや、墳丘を断ち割るような地形が見られることから、d・e・f・g・hの窪みは城郭に付随する堀切と評価することが可能である。

以上のように見ると、丘陵頂部を中心とした南北にI～IIIの平坦面(曲輪)が並列し、この曲輪群に取り付け南側と北側を堀切群によって防御する構造を読み取ることが出来る。

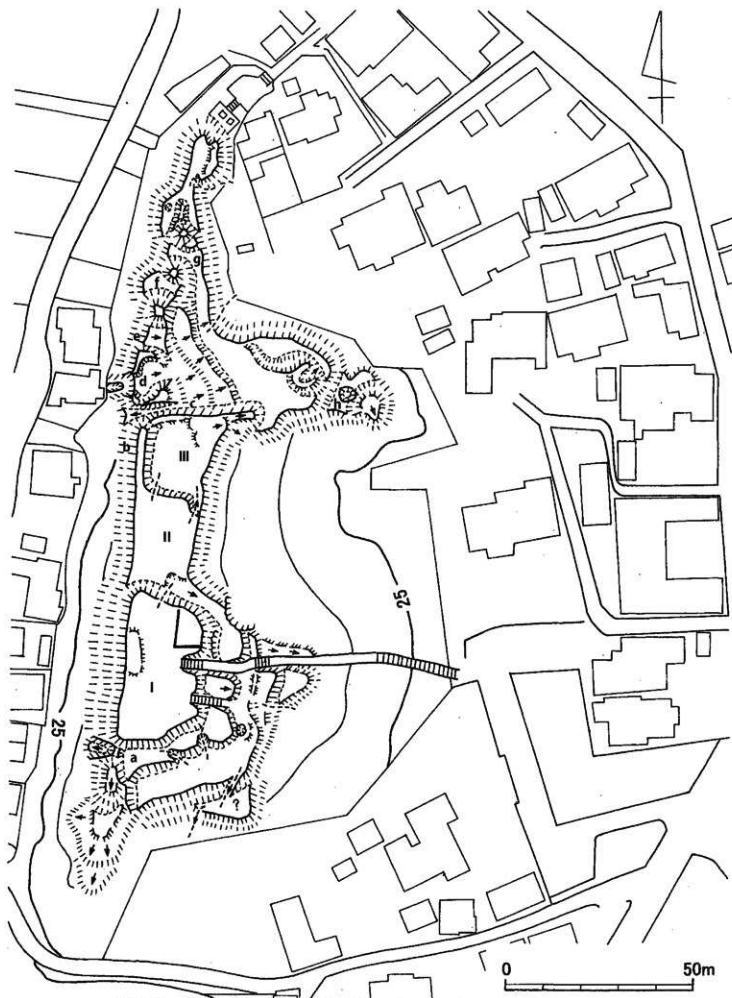
(3) まとめ

近世以降の墓地などの改変を受けてはいるが、城郭遺構は地表面で観察でき、都市部に位置する丘陵部の城郭としては、良好に残存するものと考えられる。

また年代については、発掘調査の中で12～13世紀の陶磁器等も出土してはいるが、それらは築城以前に何らかの遺跡が存在したためと考えられ、城郭遺構については通常考えられているように、15～16世紀の戦国時代のものであると考えられる。

城主等については、文献等を精査していないために現状では不明であるが、比高差の低い立地と小規模な曲輪群から構成される縄張りから見て、戦国時代に西金田の地に根付いた小領主の居館的な性格を有する城郭であると考えられる。

今回の検討により、当該地が中世城郭であったことは確実だと考えられるが、今後は、周辺の城館との比較や文献等の調査により、さらに詳細に検討を進めていきたい。



第12図 城山遺跡群中世城郭遺構縄張図 (1/1,000 九州歴史資料館調査・作図)

IV. おわりに

1. 横穴墓について

現在横穴墓は、九州から北陸まで分布が確認されている。日本全国で総数約 20 万基といわれる古墳の中で群集墳は約 8 割を占めるといわれ、横穴墓はそのうち 3～4 万基といわれている。九州では福岡県（筑前・筑後・豊前の北部）で 298 箇所、熊本（肥後）290 箇所、大分（豊前南部～豊後）229 箇所、宮崎（日向）108 箇所、肥前（佐賀）1 箇所の分布が確認されている。横穴式石室の分布が希薄で横穴墓が群集墳の主体となる地域や横穴式石室が主体で横穴墓の分布が空白になる地帯など、分布地域（旧国）内でも分布状況には偏りがある。福岡県下では遠賀川流域から周防灘沿岸にかけて多くの横穴墓が集中する。城山遺跡群のある遠賀川流域に横穴墓が集中する理由として、石炭層の上層に存在する古第三紀層の分布が大きな要因であるとされ、地質的要因が大きく作用しているものと考えられる。第 13 図、14 図に遠賀川流域の横穴墓の分布、古第三紀層の分布を示した。この図のように横穴墓の分布地域と古第三紀層の分布地域が重なることが指摘されている（長谷川 1991）。

第 14 図の遠賀川流域の横穴墓の分布状況を見てみると流域だけで 211 箇所が確認されている（遠賀川流域文化財学会 2007）。福岡県下の大半の横穴墓がこの地域に集中する。城山遺跡群の横穴墓は遠賀川流域の特徴である古第三紀層の砂岩層に掘削されている。

第 1 表には現在の横穴墓指定史跡の一覧を示したが、19 箇所が指定を受け、うち 14 箇所には装飾が見られる。遠賀川流域の古墳横穴も赤色顔料による装飾と線刻が確認され、墳丘を持つ横穴墓が確認されている。

第 1 表 横穴墓指定史跡一覧

旧国	都道府県	市町村	名称	数	時期	特徴
陸奥	宮城	三本木町	山畑横穴群	26	6～8世紀	装飾
陸奥	福島	泉崎村	泉崎横穴	2	7世紀前半	装飾
陸奥	福島	双葉町	清戸迫横穴	5	7世紀初?	装飾
陸奥	福島	いわき市	中田横穴	1	6世紀	装飾
陸奥	福島	原町市	羽山横穴	1	6世紀末～7世紀初	装飾
下野	栃木	馬頭町	唐御所横穴	1	7世紀代	
武蔵	埼玉	吉見町	吉見百穴	222		
上総	千葉	長柄町	長柄横穴群	35	6世紀後～7世紀中	装飾
加賀	石川	加賀市	法泉山横穴古墳	約 80	6世紀後～7世紀末	
駿河	静岡	函南町	柏谷横穴群	94	7～8世紀	
駿河	静岡	伊豆長岡町	北江洲横穴群	90 弱	7世紀後～8世紀	
河内	大阪府	柏原市	高井田横穴	148	6世紀前～7世紀前	装飾
筑前	福岡	鞍手町	古月横穴	23	6世紀後～7世紀後	装飾・墳丘
肥後	熊本	人吉市	大村横穴群	26		装飾
肥後	熊本	玉名市	石負ノ観音古墳	5		装飾
肥後	熊本	玉名市	石負ナギノ横穴群	48		装飾
肥後	熊本	山鹿市	鍋田横穴	60		装飾
豊後	大分	宇佐市	四日市横穴群	161		装飾
日向	宮崎	宮崎市	蓮ヶ池横穴群	82	6世紀後～7世紀後	装飾・墳丘

2. 調査成果の検討

(1) 横穴墓群の規模

城山遺跡群では現在までの地形測量、現地踏査より、222 基の横穴墓と 1 基の横穴式石室を主体部とする古墳、横穴墓に伴うと考えられる墳丘 12 基を確認している。

第 2 表に九州における横穴墓群の規模の比較を行っている。現在九州において 926 箇所の横穴墓（群）が確認されている。その中で、100 基以上のものを大型、200 基以上を超大型とした。超大型の横穴墓群は肥後と豊前北部にのみ確認でき、九州の横穴墓遺跡総数の 0.4% の割合である。城山遺跡群は超大型に含まれる。

第 2 表 九州における横穴墓の規模の比較

筑前	157 遺跡
100 基以上	0
200 基以上	0
500 基以上	0

筑後	25 遺跡
100 基以上	0
200 基以上	0
500 基以上	0

豊前北部（福岡）	116 遺跡
100 基以上	11 (9.4%)
200 基以上	2 (1.7%)
500 基以上	1 (0.8%)

九州	926 遺跡
100 基以上	23 (2.5%)
200 基以上	4 (0.4%)
500 基以上	1 (0.001%)

豊前南部・豊後（大分）	229 遺跡
100 基以上	3 (1.3%)
200 基以上	0
500 基以上	0

日向（宮崎）	108 遺跡
100 基以上	1 (0.9%)
200 基以上	0
500 基以上	0

肥後（熊本）	290 遺跡
100 基以上	8 (2.7%)
200 基以上	2 (0.6%)
500 基以上	0

※下部グループは上位グループを含む延数
 ※遺跡数・基数は「九州の横穴墓と地下式横穴」
 九州前方後円墳研究会 2001 による

200 基以上の横穴墓群面積・横穴墓密度比較

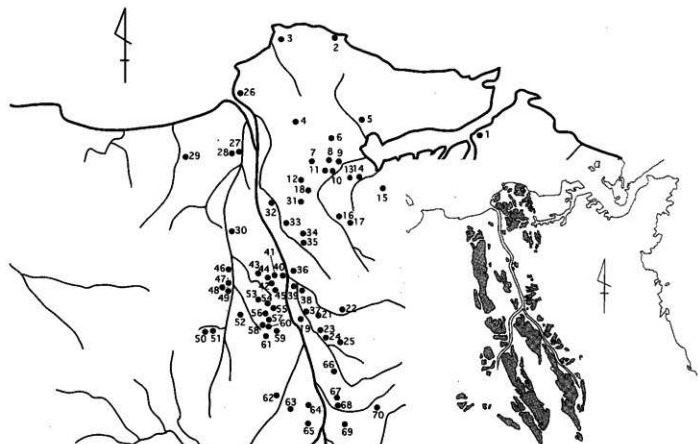
遺跡名	面積	横穴墓の密度
城山遺跡群（豊前）	約 10,000m ²	0.02
竹並遺跡群（豊前）	約 370,000m ²	0.002
湯の口横穴墓群（肥後）	約 60,000m ²	0.0043
瀬戸口横穴墓群（肥後）	約 65,000m ²	0.003

(2) 横穴墓の構造

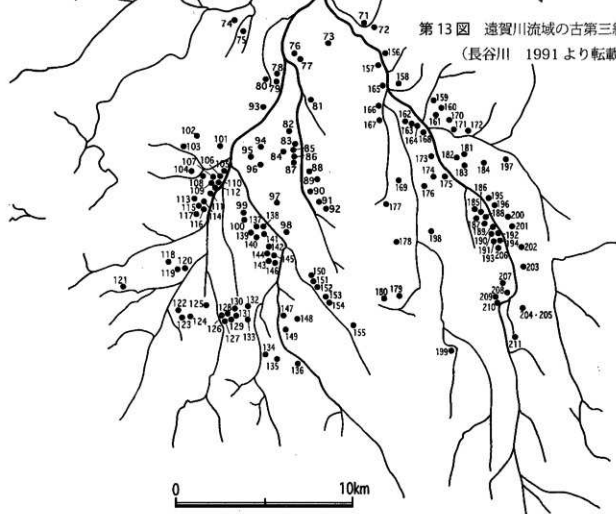
平面プラン

北側丘陵で調査した Y124、Y94 はほぼ正方形のプラン、Y107 は長さに比べやや幅が広い横長方形のプランである。南側丘陵の北端付近の Y133 は横長方形プランであり、南側丘陵東側斜面の Y198、Y199 は幅に比べ長さが長い縦長方形のプランである。

現状では、正方形、横長方形、縦長方形の三つのプランが見られ、正方形、横長方形、縦長方形への時期的変遷が想定できる。周辺地域の傾向では横長方形のプランが最終形態に近く、今後



第 13 図 遠賀川流域の古第三紀層分布図
(長谷川 1991 より転載)



第 14 図 遠賀川流域の横穴墓分布図 (遠賀川流域文化財学習会 2007 より転載)

は周辺地域との比較検討の中で縦長方形プランの位置づけが課題として残る。

天井部の形態

現状の調査成果より天井部の構造が確認できた6基の横穴墓についてはすべてドーム型である。現在までの調査では家型天井、アーチ型天井になるものは確認できていない。

周辺地域では、家型天井、アーチ型天井も見られる。今後の課題としてドーム型以外の天井部形態の有無確認が周辺地域との比較検討を行う上で必要である。

羨門部の石積

羨道部を一部横穴式石室状に石材で構築するものや羨門上部に底石上の石材を架構する横穴墓がある。羨門部の石積については、遠賀川流域の横穴墓を中心に形態分類等の研究が行われている(長谷川 1991)。分布範囲は関東にまで及ぶ。横穴式石室を意識したといわれるが、羨門部の補強の目的も近年指摘されている(占後 2002)。

城山遺跡群では大きく2タイプを確認している。ひとつはY199のように地山を土柱状に堀残し石材を一石乗せ、底石を架構するもの。もうひとつはY94やY133のように羨道状の石積を持ちその上部に天井石のように石材を架構するもの。Y133で特徴的なのは石積の下部は地山をテラス状に整形している点である。この技法は横穴式石室を意識するものではなく、羨門上部が脆弱なための補強の目的も考えられる。今回の調査では、羨道上の石積を持つ横穴墓と底石と呼ばれる構造のものが確認できている。当遺跡では北側丘陵の南端墳丘9の西側斜面及び南側丘陵に分布し、墳丘を持つ横穴墓が北側丘陵の北半の東側斜面に分布することから、時期的な分布の偏在が考えられる。

墳丘

現在横穴墓に伴うと考えられる墳丘を12基確認している。現状で墳丘を持つ横穴墓は北側丘陵の北半に集中するが、南端に墳丘9と9'が存在することより、現在墓地や中世城館のために平坦面になっている部分にも墳丘が存在した可能性がある。現在の確認数から、城山遺跡群での基数にしめる墳丘の割合は5.4%となり高い割合を示す。墳丘のある横穴墓は九州では筑前東部から豊前北部と日向に分布するが、九州内での墳丘確認数は横穴墓総数の0.3%の割合である。

盛土の状況については墳丘5において盛土観察を行った。調査の概要でも述べたが、盛土は地山の掘削土の積上げによる構造の一括盛土であった。

横穴墓の墓道

Y124とY133において墓道部分にトレンチを設定し、部分的に墓道の調査を行った。調査の結果からは、墓道部の共有関係、前庭部分の構造確認等はできていない。横穴墓前面における構造確認は今後の課題である。

(3) 横穴式石室を内部主体に持つ古墳

今回の調査で内部主体を確認したY122であるが、単室両袖の横穴式石室を内部主体に持つ古

墳であることが判明した。現状で確認できる石室墳は1基のみである。墳丘盛土は確認できる部分において黒色土と褐色土の互層が確認でき、版築状の盛土が行われている。盛土状況が確認できる他の墳丘の観察からは版築状の盛土は確認できず墳丘5と同様の盛土である。他の12基の墳丘は横穴墓に伴う可能性が高い。出土遺物から横穴墓との階層差等は確認できていない。これは、横穴墓の調査基数の少なさ、土器類以外の遺物がないことによる。今後は横穴墓との関係性の把握も課題となる。

(4) 出土遺構から見た遺構の時期

今回の調査で出土した遺物は、須恵器、土師器、中世の青磁片、石鍋、近世の陶磁器類である。

Y124では墓道の床面付近より須恵器の提瓶、平瓶、甕等が出土し、Y199では玄門部付近で須恵器、土師器がまとまって出土した。Y124で出土した甕は5世紀末から6世紀の前半であると考えられ、Y199から出土した甕は6世紀の後半から末と考えられる。Y133では入口部付近で須恵器高杯の脚部が出土している。6世紀の後半ごろと考えられる。

現在唯一確認している石室墳であるY122からは須恵器甕身、鉄鏃、装身具である耳環が出土している。須恵器甕身は6世紀の後半頃と考えられる。

墳丘9のトレンチの北側溝状部分で円筒埴輪片が埋土中より出土した。この円筒埴輪片は墳丘9の周辺からも表採されており、墳丘に樹立された可能性が高い。この埴輪は6世紀の半ば以降と考えられる。

調査中、地元住民のご教示により過去にこの遺跡から採集されたとされる資料の存在が明らかとなった。この資料は南側丘陵の南端付近で採集されたとされる。実見した結果、7世紀前半頃と考えられる須恵器、土師器であった。この遺物は南丘陵の南端付近の工事中に採集されたものであり、出土遺構等の詳細は不明である。

出土遺物の時期より、横穴墓は北側丘陵の北端付近より築造が始まり、南に向かい順次築造され、最終的には南側丘陵の南端付近まで横穴墓群が形成されたと考えられる。

(5) 城山遺跡群の群構造について

現在の調査成果より城山遺跡群の横穴墓群における群構造について考えてみる。

北側丘陵の北半のY124は方形プランのドーム天井。墳丘9西側のY94では横穴式石室の羨道状の羨門部の石積が確認でき、ほぼ方形であるが玄室長よりも幅が少し広く、天井部はドーム型である。墳丘9東側のY107では横長方形のプランとなり、天井部はドーム型である。墳丘9周辺より採集される埴輪片は6世紀の半ば以降とされる。

羨門部の石積は南側丘陵西側斜面のY163より北側にしか分布していない。また、南側丘陵ではY133は横長方形のプランであり、Y199は縦長方形のプランである。遺物も北側丘陵より新しい。

上記をまとめると当横穴墓群では方形プラン、ドーム型天井、羨門部の石積の出現、横長プランへの移行、南側丘陵への造墓開始、最終的に縦長方形プランとなることが推定できる。未調査の横穴墓があるため、築造契機、終了時の形態にはなお未確定要素が残る。今後さらに検証が必要である。

また、今回調査において横穴墓の分布が確認できない部分において、有無確認のため表土の除去とトレンチ調査を行った。結果、調査部分において新規横穴墓は確認できていない。今後の課題として、群構造の解明のためにもそこに横穴墓がないことの意味を検討する必要がある。検討するに当たって、他の横穴墓分布の空白部分での横穴墓の有無の確認が課題となろう。

(6) 古墳時代以降

Ⅲ章3で九州歴史資料館岡寺良氏にまもていただいた。中世城館であるが居館的な使用も考えられ、近世の金田手永六角家以前にもこの地が重要な地域であったことが推定できる。また、この中世城館遺構とは時期が異なると考えられる中世の遺物、龍泉窯系の青磁も遺跡内より出土している。これらの遺構、遺物から古墳時代以降城山の地が、周辺地域の中で重要な位置を占めていたことが推定できる。

3. まとめ

城山遺跡群は横穴墓群を中心とする遺跡であり、福岡県下の横穴墓集中地域である遠賀川流域、豊前北部などの横穴墓群の中でも最大規模である。全国的視野で見ても屈指の規模を誇りまた残存状態もよい。遺構の確認数は横穴墓222基、古墳1基、墳丘12基を数え、それ以降の主要遺構として中世城館がある。

現在までの調査成果より横穴墓群の変遷過程の推定と横穴墓群の規模が判明した。横穴墓の構造については、平面プランは方形、長方形、縦長方形のプランを確認しているが、天井部形態はドーム型のみしか確認できていない。墓道に関しては1墓道1墓室の横穴墓しか検出しておらず、横穴墓の構造解明の点では疑問が残る。城山遺跡群で最も新しい遺物については残念ながら出土遺構は不明である。今後の課題として横穴墓群の群構造の把握、横穴墓の確認、内部構造、前庭部、墓道部の構造を総合して把握するための発掘調査や横穴墓と古墳の関係性の解明、各遺構の時期確定のための遺物収集があげられる。今回は、開発に先立つ確認調査が発端ではあるものの、現在は遺跡の現状保存の方針が決定し協議を行っている。城山遺跡群は今後の保存、活用を視野に入れた調査が必要となる。また、次年度以降も現状での課題の解明に向けて調査を継続していく。今後この遺跡の詳細な姿が見えてくると考えられる。

引用・参考文献

- 佐田茂 1975 『九州横穴の形成と時期』考古学雑誌61-1 日本考古学会
池上悟 1980 『横穴墓』考古学ライブラリー6 ニューサイエンス社
長谷川清之 1991 『遠賀川流域における横穴墓の研究』児嶋隆人先生喜寿記念論集『古文化論叢』児嶋隆人先生喜寿記念論集刊行会
毛利智久 1995 『長浦遺跡』徳波町教育委員会
船山良一・松本敏三・池田史 1996 『須志器集成図録 第5巻西日本編』雄山閣
田村恒福 1997 『水町遺跡群』直方市教育委員会
九州前方後円墳研究会 2001 『九州の横穴墓と地下式横穴墓』九州前方後円墳研究会
古後憲浩 2002 『新延野遺跡群』鞍手町教育委員会
井上勇也 2004 『横穴墓と石室墳の関係』『福岡人考古学論集-小田富士雄先生退職記念-』小田富士雄先生退職記念事業会
古後憲浩編 2004 『古墳横穴』鞍手町教育委員会
遠賀川流域文化財学習会 2007 『尾遠賀川流域の横穴墓』

報 告 書 抄 錄

ふりがな	じょうやまいせきぐん							
書名	城山遺跡群							
副書名	確認調査概要報告							
シリーズ名	福智町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第2集							
編著者名	井上 勇也・岡寺 良							
編集機関	福智町教育委員会							
所在地	福岡県田川郡福智町赤池 970-3 TEL 0947-28-2046 FAX 0947-28-4565							
発行年月日	2011年3月22日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘要因
しょうやまいせきぐん 城山 遺跡群	ふくおかけん 福岡県 たがわけん 田川郡 ふくちまち 福智町 かなだ 金田 715-1 他	40610		33° 40' 42"	130° 46' 47"	20081105 ～ 20081128 20090701 ～ 20100326	約 30,000 ㎡	試掘・確認 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
城山遺跡群	古墳 横穴墓 中世山城	古墳時代 中世	横穴墓、古墳 中世城館	須恵器、土師器、装身具 鉄器、青磁、石銅、 近世陶磁器		我が国有数の規模を誇る 横穴墓群		
要約	平成 21 年度、22 年度国庫補助事業で開発事前の確認調査として遺跡の内容確認調査を行った。 調査の結果、城山遺跡群は県下最大規模の横穴墓群を中心とする遺跡であり、群全体が良好に残存する。現在までの調査で横穴墓 222 基、横穴墓に伴うであろう埴丘 12 基、古墳 1 基、中世城館、近世墓地を確認している。我が国の横穴墓群の規模の比較において最大級の横穴墓群である。 本報告では、遺跡の現状と現在までの調査成果と課題をまとめた。平成 23 年度以降は重要遺跡としての範囲内容確認を継続的に実施し、周辺地域との比較検討から城山遺跡群の位置づけを行っていく予定である。							

城山遺跡群

調査概要報告

福智町文化財調査報告書第2集

平成23年3月18日

発行 福智町教育委員会

〒822-1101 福岡県田川郡福智町赤池970番地3

印刷 マツオ印刷株式会社

〒821-0012 福岡県嘉麻市上山田407番地